
サクラノキズナ

金地院 豊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サクラノキズナ

【NZコード】

N4497P

【作者名】

金地院 憂

【あらすじ】

勉強一筋の桜木涼子。

厳しい父親との溝。

そんな中、クラスメートの田島に心を開いていく。

「なあ桜木、応仁の乱が起じたのって何年だ?」

隣の席の田島が、小声で私に尋ねた。

「1467年。」

ペンを走らせる手を止める事なく、小さなガキ大将の質問に即答する。

「2467年です!」

私の解答をそつくりそのまま、教壇の先生に伝えたかっただけ。

大声で言つたため、それはクラス全員の耳に届いた。

「おおーい、田島。

今2010年だぞおー!」

先生の溜め息に、教室が笑いで包まれる。

私は表情一つ変えずに、ノートを叩いていた。

高校受験を再来月に控えているにも関わらず、緊張感の欠ける授業

に、私はうんざりしていた。

かと言つて、授業を聞いていない訳ではない。

小学一年生から通わされている塾で、中学校の範囲は全て終わらせてしまった。

だから復習も兼ねて、学校の授業をノートにまとめているのだ。

「勉強が出来ない奴に、学校に行く資格はない。」

それが、40代で大手製薬会社で社長まで上り詰めた父親の口癖だつた。

頑固で仕事人間である父は、私が幼稚園に通いはじめた春に、母と離婚した。

と言つよりも、母親が家を出た。

口論を繰り返していた両親を見ていて、私は幼いながらに状況を理解していく。

両親の離婚後、父親と暮らしていた私は、家に一人でいる事が多くなつた。

と言つても、父が毎日問題集を置いて行くので、それを終わらせるのが私と父の約束だつた。

ある日、問題集に手をつけずにテレビを見ていたところ、帰ってきた父に平手打ちを入れられた。

私を叩いた父は、眼鏡の向いの皿を吊り上げて、口を開いた。

「お前もあの女と同じなのか。」

それ以来、私が問題集を開かない日はなかつた。

勉強は楽しくなかつたが、それだけが父との繋がりだつた。

母親の愛情を奪われた私の、唯一の家庭だつた。

「桜木に、やつときはサンキューな！」

結局怒られて課題出されたけどな……」

終業のチャイムが鳴るや否やサッカー部のユニフォームに着替えた田島が、色褪せたスクールバッグを背負いながら私に話しかけた。

「うん。」

テキストを鞄に戻しながら、私は空返事をした。

「でも桜木はすげえよ。」

電子辞書よりも桜木に聞いた方が早いもんなあ～」

「…………。」

今度は返事もえせずに、私は急ぎ足で教室を出た。

「涼子。

先月の模試の結果はどうだったんだ。」

スーパーの惣菜を突きながら、父が私に聞いてきた。
箸を置いて、私は脇のクリアファイルから今日届いたばかりの成績表を差し出した。

「…なんだこれは。

前回よりも数学が4点も落ちているじゃないか。

…明日は図書館に籠つて勉強しなさい。」

父は、前回よりも7点上がった理科については何も言わなかつた。

「…ああでもまあ。」

私は食器を台所に運び、お椀に残ったインスタントの味噌汁を水道に流した。

それから自分の部屋に戻り、こつものように日記を開く。

”11月9日、今日は模試の成績表が帰ってきた。

お父さんに数学の出来を咎められた。

明日は図書館に行くよって言われた。

明日が何の日か、多分知らないだろ？。”

自分の誕生日の前の欄に、小さな文字で綴った。

それから勉強を始め、床に着いた時には、すでに15歳になっていた。

「夕方には迎えに来るから、それまでにこれを終わらせなさい。」

そう言って父は、今買ってきたばかりの数学の問題集を手渡した。

「…分かりました。」

私が助手席から降りると、父はすぐ車を走らせてその場を去った。

車が見えなくなつてから、私は図書館に入った。

いつも通り窓際の席を陣取り、私は課されたノルマに取り掛かった。

前半は基本問題が中心だったので、半分終わらせるのに3時間掛か

らなかつた。

飲み物を買いに行こうと席を立つた瞬間、聞き覚えのある甲高い声に名前を呼ばれた。

「あれっ、桜木じゃんかよお！」

私は振り返った。

部活帰りだつたらしく、中学校のロゴの入つたジャージに身を包んだ田島が立っていた。

「…どうも。」

財布を握り締めた私は、軽く頭を下げて級友の脇を通り過ぎた。

自販機の前に着き、品定めをしていると、後ろから口焼けした腕が伸びてきた。

その手は器用に硬貨を投入し、ボタンを押した。

そして自販機からミルクティーを取り出した田島は、私にそれを差し出した。

「ほら。

俺からの誕生日プレゼント！」

真っ黒な顔に笑顔が浮かび、白い歯が輝いた。

「えつ。」

驚いた私は、目を見開いて顔を上げた。

「お前の誕生日、11月10日つて、俺の妹も誕生日なんだ。

だから、覚えてたんだよ。

別に、準備してたとかじや無いからなつ！」

そして強引に、生温い缶を私の手に握らせた。

一人でベンチに腰掛け、無言のまま時間が過ぎた。

「あのそつ…」

田島が切り出した。

「昨日言つてた宿題なんだけど、戦国武将を誰か一人決めてレポートにまとめなきゃいけないんだよね…

悪いんだけどよ、ちよい面倒見てくんねえか？」

顔をしかめながら、田島が私の顔を覗き込んだ。

「いいけど…」

私はわざと田線をずらして答えた。

始めてから30分も経たずに、田島はシャーペンを置いた。

「つて、何も知らないんだから、何も書けねえってのー！」

田島が伸びをしながら嘆いた。

「…辞書で調べて、丸写しにすればいいじゃない。」

問題集が終盤に入った私は、僅かにさつきよりも真面目に対応した。

「それだ桜木！

電子辞書貸してちょー！」

田島は足をバタバタさせながら手を伸ばす。

「壊さないでよお…」

言い聞かせるように田島に使い方を教えて、私は再び自分の勉強に戻った。

「おい、涼子。

勉強ははかどったか。

帰るだ。」

父が迎えに来たのは、午後6時を回つてからだつた。

「帰るのか、桜木。

じゃあ、これ。

ありがとうな。」

私は田島から貸していた電子辞書を受け取り、あいさつをしてから父の後について図書館を出た。

車に乗り込むと、脇に白いボール紙の箱があつた。

「誕生日ケーキ買って来たんだ。

帰つて食べようか。」

父がエンジンを掛けながら言った。

私は、箱に書いてある英単語が気になり、電子辞書を開いた。

その瞬間、私は思わず笑つた。

” いんどおれのしあいみにこいよ ”

ガキ大将からのぶつきりぽうつなメッセージが、キーワード検索欄に残されていた。

「どうかしたのか。」

父が尋ねた。

「何でもないよ。」

そう答えて私は、英単語を調べずに電子辞書を閉じた。

「悪いな！

かなり待たせちまつた…」

肩から下げる大きなエナメルバッグを揺らしながら、学ランに身を包んだ田島が走ってきてきた。

「別に待つてないわよ。

それより早く行きましょ。」

かれこれ30分以上読み耽っていた本にしおりを挟み、私は古びたベンチから腰を上げる。

その瞬間、まだ履き慣れない革靴の踵を滑らせ、倒れそうになった。

「つまつ…ヒ。

大丈夫かよつ？

田島が咄嗟に出した左手に体重を預けた私は、慌てて態勢を立て直した。

「な、何ともないわ。」

「…ありがとうございます。」

鞄を抱えながら、私は田を伏せた。

「んっ。」

じゃあ早く行けよー。」

田島は今度は右手を差し出した。

「…うん。」

私はその手を握り締めた。

大きくて、硬いけれど、どこか暖かくて、優しい手。

お互いの体温を感じながら、駅前のロータリーを歩き出した。

あれから半年。

私は、目標でもあった県内で一番偏差値の高い公立高校に入学した。

一方で田島は、唯一の取り柄とも言えるサッカーの特待生で、県内有数の設備を誇る私立高校に進学していた。

一年生ながら、既に先輩の練習試合にも出して貰っているそうだ。
現に今日も、県外のクラブチームとの調整試合に同行して、私との待ち合わせに遅刻してきた。

図書館で田島に会ったあの日の翌週、高校見学に行くといつも田島の父を出し抜いた私は、田島の試合を見るため隣町の中学校まで足を運んだ。

グラウンドの脇のネット裏から眺めていた私を見つけた田島は、試合中にも関わらず、満面の笑みで私に手を振った。

「見てー、あの子。

試合中なのに手なんか振ってる。

変なの〜。」

私のすぐ横で試合を見ていた選手の母親たちが、田島を見て笑っているのを聞いて、私は自分の事のように恥ずかしくなった。

しかしぬる瞬間、田島が自陣から蹴ったボールが、鮮やかな放物線を描いて、相手のゴールに吸い込まれた。

ガツツポーズを決める田島の回りに、味方の選手が集まる。

仲間から髪の毛をくしゃくしゃに撫でられている田島は、白い歯を見つめていた。

ネットの編み目から見える田島は、一枚のスナップ写真の様だった。サッカーをしている田島を、ずっと見てみたい。

テキストの詰まつた鞄を持つ手に力が入った。

悪戯な木枯らしが前髪を揺らすのも気にせず、私は田島の姿をじっと見ていた。

それから新年を迎え、高校入試が終わると、未来への扉を開いた私たちを急かす様に、卒業の日が来た。

式も終わり、「写真を撮る群れに混じる事なく校門を出た私は、卒業生代表の言葉という大役を無事終えたばかりの田島に呼び止められた。

「ずっと言っていたかったんだ。

俺、桜木のことが好きなんだよ。」

制服のボタンを一番上まで閉め、柄にもなく真面目な顔をする田島に、私は腹を抱えて笑った。

今考えると失礼だが、ものの三十分前に式辞で壇上に上がった時以

上に、肩に力が入っている田島が、とても滑稽に思えたのだ。

寒さの残る中で桜が蕾を開きかけたその日から、私たちは付き合い始めた。

映画館に着いた時には、上映まで五分を切っていた。

半年後の映画の予告が始まっている中、私と田島は腰を屈めて席まで移動した。

隙あればスカートを覗き込もうとする田島を警戒しながら、私は席に着いた。

上映中、私は何度も田島の方を向いた。

ただでさえ童顔であるのに、漫画の実写版映画に入っている田島は、実際よりもかなり幼く見えた。

結局私は映画の内容をほとんど覚えておらず、興奮気味に感想を述べる田島に、適当な相槌を押し付けた。

その後に一人でファーストフード店に入り、私はハンバーガーを頬張りながら、田島の学校の話に終始笑う事を余儀なくされた。

テスト中に解答用紙で折った紙ヒコーキを先生に当ててしまふ学級委員長など、私の学校にはいなかつた。

日が沈み店を出た後、田島は私を自宅まで送ってくれた。

家の前まで来て、辺りを見回した田島は、鍵を鞄から取り出す私の頬にいつも通りキスをした。

その度私は文句を言うのだが、本心ではない事は既に田島に知られている。

上機嫌で帰る彼氏の背中を見送つてから、よつやく我が家の玄関に入つた。

そして大急ぎで着替えから、夕食の支度に取り掛かる。

新年度を迎える海外に工場を設ける準備に取り掛かった父は、今まで以上に多忙になり、今では一週間に一度自宅に帰れれば良い方だつた。

その分、父親の呪縛から解放された私は、家事を担う事さえ嬉しかつた。

油断すると田島が泊まりに来る事を除けば、だが。

一人で食事を済ませた後、リビングのテーブルで予習をしていた私は、玄関が開いたのを聞き付け、鍋に火をかけた。

「ただいま。」

疲れきった表情の父が鞄を椅子に置く。

「お帰りなさい。

お風呂沸いてるからね。」

食卓テーブルに箸を置きながら、私が伝える。

「先に夕食を取ろうかな。

その方が片付けが早く済むだろう。」

リビングのテーブルに残された私のテキストとノートを見つけた父が、満足げに言った。

用意した食事を難無く平らげた父が、眼鏡を外しながら私を呼んだ。

「明日、出掛ける所があるから、付いて来てくれないか。」

父からの思いがけない催促に、私は二つ返事で首を振った。

翌日、一人で遅めの朝食を取つてから、父の運転する車で家を出た。

父親がわざとらしく助手席に荷物を置いたので、私は後ろの席に乗

り込んだ。

単語帳を眺めていた私に、父が突然声をかけた。

「涼子。

高校に入つて、彼氏は出来たか?」

父の口から出たとは思えない質問に、私は驚きを隠せなかつた。

「えつー!?」

父は小さく笑つて、再び口を開いた。

「私がこんな事を言い出して、驚いただらう。」

それから再び沈黙が続き、気が付くと車はどこかの駐車場に着いていた。

車から降りて始めて、ここが靈園だと気付いた。

無言で園内に入る父の後に、私は不安を覚えつつ着いて行つた。

園内の端まで来た所で、父は足を止めた。

そして父と向かい合つた墓石を見て、私は凍り付いた。

…刻まれていたのは、10年前に家を出た母の名前。

「母さんは家を出でから、間もなく」の世を去つた。

お前は私たち夫婦が、いつも口論ばかりしていたのを見て、離婚したと思つていただろう。

しかし本当は違う。

私の言う事を聞かずに寛定期検診を受けなかつた母さんに、突然の腹痛から末期ガンが見つかり、私は入院を薦めていた。

しかし母さんは聞く耳を持たなかつた。

”どうせ入院した所で病気は治らない。

なら残された人生を、自分の好きな様に使いたい。”

そう言って私の提案を頑なに拒否した。

案の定、彼女の容態は急変して、すぐに大学病院に運ばれた。

しかし残酷にも、医師は私に非常な宣告をした。

「もつてあと二、三日です。

覚悟しておいてください。」

私が腹を据える間もなく、彼女はその夜に息を引き取つた。

残された遺書に記された彼女の移行で、葬儀は行われなかつた。

そして私の人生から母さんが消えた。

すぐに私は、お前を育てる責任感に駆られた。

一人娘の将来を思つづけに、お前に多くを求め過ぎるよつになつて
いた。

そうしてお前に接して来た自分に、私は嫌悪感を抱き続けた。

そしてこの間、街中でお前を見つけた。

すぐ横には、男の子がいた。

お前も高校生だから、すぐに察しはついた。

しかし私は驚いた。

あんな風に、嬉しそうに笑う涼子を、私は初めて見た。

その瞬間、自分への失望が絶望に変わつた。

私は娘から笑顔を奪つていた。

娘の将来を思つあまり、娘の今を軽視していた。

私は父親失格だな。」

自嘲氣味に笑う父の目から、涙が零れた。

私は、父の背中に寄り添つた。

「そんな事ないよ。

お父さんは、私の事を思つて、ずっと母さんの事を背負つて来てくれた。

だから今日からは、お父さんが背負つて来た事、私にも半分背負わせて。

お父さんの悲しさ、私にも半分引き取らせて。

私の楽しい事、嬉しい事、半分分けてあげるから。

だから……」

堪えていた涙が、私の頬を伝つた。

そして、思つていたよりも大きい父の背中で、声を押し殺して泣いた。

「お盆にも、また来るね、お母さん。」

線香に火を点け、手を合わせた。

そして、父の腕から荷物を奪つた。

「私が持つてあげる。

早く、帰ろ。」

父は笑みを浮かべた。

「せうこえば、あの男の子は誰なんだ？」

今度うちに連れて来なさい。」

私は顔を赤らめて笑った。

「ん~、田島っていうんだだけね。

お父さんが思つてゐるよつなイイ奴じやないよ。」

次の日、公園で待ち合わせた田島に、私はあつた事すべて話した。

誰かに言つたことないよつ、誰かに聞いて欲しかった。

すべて話しあえてから、田島は私の手を握つて言った。

「桜木の父ちゃん、かっこいいな。

俺こは、桜木の父ちゃんみたいに、お前の苦しみを背負つてやる事
は出来ないもんな。

でもその代わり、俺の楽しい事、嬉しい事、半分だなんて言わず、50%くらいは分けてやるよ。」

「田島… つて増えてないからー。」

私は本気で田島の頭を疑った。

「あれつ、そつか。

じゃあ、ゼーんぶ桜木にあげるよ。

105%だ。」

私の大好きな笑顔が、私を励ました。

「…バカ。

消費税入ってるじゃん。」

そう言って私は、田島の頬にキスをした。

一番好きな人が隣にいる。

田島の手は、やっぱり暖かくて優しい。

柔らかい春風が、私たちを包んでいる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4497p/>

サクラノキズナ

2010年12月12日08時41分発行